壬申の乱と隠された九州
英雄に祭り上げられた天武

＋reminder

1、隠された倭姫王
2、隠された九州の吉野
3、高市皇子と九州王朝
4、高市皇子と王朝交代

金銅透彫龍紋冠

金銅製壷鐙

宮地嶽古墳（径35mの円墳）

金銅製頭推太刀柄頭（260㎝復元品）

（reminder）倭国（九州王朝）略史その１

倭国（九州王朝）の始まりから滅亡までの略史

①【倭人の登場】紀元前11～10世紀倭人が周王朝へ朝鮮の箕子を仲介とし朝貢。鬯草を献じ、「昧（舞）」を奉納。

・『論衡』「周の時、天下太平にして、倭人来たりて鬯草を献ず。玄菟楽浪。武帝の時、置く。皆朝鮮・穢貉・句麗の蛮夷。 殷の道衰え、箕子去りて朝鮮に之く。其の民に教うるに礼義を以てし、田蚕織作せしむ。⇒紀元前10世紀頃箕子が朝鮮侯となり、儀礼や水田耕作・絹織物技術を教えた。

・『礼記』「昧（マイ舞）、東夷の樂なり。・・・夷蠻の樂を（周公の）大廟に納む」

・『後漢書』「（倭奴国の）使人自ら大夫と称す」「大夫」は夏、殷、周の官制。周代で断絶。

②【九州王朝の始まり】紀元前2～3世紀頃朝鮮海峡を拠点とする**青銅の武器を携えた勢力が、北部九州の稲作地帯に侵攻**し、従来の統治者出雲（大国）から支配権を奪う。**（＊国譲りと天孫降臨）**

・「吉武高木遺跡群（福岡市西区）」から、我が国で最も早く（BC2世紀ごろ）「三種の神器（鏡・玉・剣）」が出土する。（①図）

・『古事記』邇邇芸命の降臨地「筑紫の日向の高千穂の久士布流多気」に見える「日向」地名は高祖連山の吉武高木と怡土平野三雲・井原を結ぶ街道にある。（日向山・日向川など）

・邇邇芸命の降臨の言葉「此の地は、韓国に向ひ真来通り、笠沙の御前にして、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、甚だ吉き地」は半島との窓口怡土平野に相応しい。

・高祖連山に「くしふるやま」もある。「黒田家文書」日向山に、新村押立とあれば、椚村は、此時立しなるべし。民家の後に、あるを、くしふる山と云。

③【怡土王都時代】紀元前後300年間怡土平野を拠点に統治・

『古事記』日子穂穂手見命は、高千穂宮に伍佰捌拾歳坐す。御陵は、卽ち其の高千穂山の西に在り。「580年間統治」とは「1年を2歳と計算する2倍年暦」で、実質は約300年。「彦火火出見」の名は「襲名」で歴代の王の称号。・「高祖連山」の西の怡土平野には「三雲・平原・井原」などの王墓級の遺跡が300年間続き、「三種の神器」遺物が出土。このことを裏付ける。

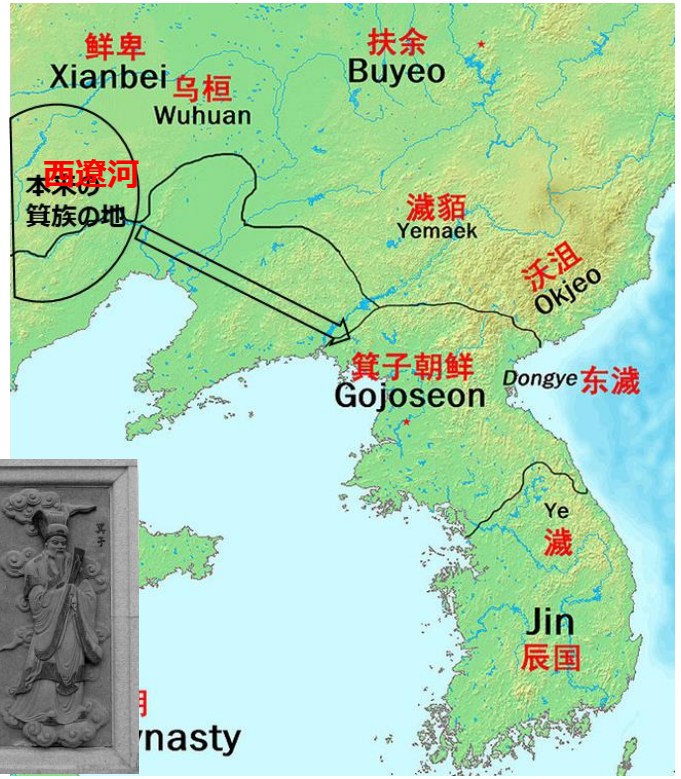
平原方形周溝墓出土国内最大の銅鏡「内行花文鏡」（直径46・5cm）

井原遺跡出土3種の神器

実証される「箕子」の東夷教化

紀元前10世紀ごろ箕子が東夷を教化し「田蚕織作せしむ」

箕子（BC10～11世紀？）は殷の29代帝乙の兄で、30代紂王の叔父。**箕族は殷の東北「箕の地域」に奉じられた**為箕子と呼ばれる。暴君化した紂王を諫めるも取り入れられず、身の危険を感じ発狂を装い幽閉される。殷を倒した周の武王は箕子を崇めて朝鮮侯とする。**箕子は殷の遺臣を率いて朝鮮に行き**、東夷を教化し「**周代の儀礼（礼儀）と、水田耕作や桑を育て蚕を飼い、絹織物を織ることを教えた**」という。⇒**儀礼とは周代の制度・祭祀・冠制をいう。**



放射性炭素（C14）年代測定法が実証する箕子による水田技術伝来

（朝日新聞）**国立歴史民俗博物館**は、北部九州から出土した土器などの採取試料を放射性炭素（C14）年代測定法で分析し**水田稲作が日本に伝わり弥生時代が幕を開けたのは定説より約500年早い紀元前1000年ころで「弥生の始まりを考えるには、殷が滅亡し西周が成立するころ（紀元前11世紀）の時代背景を検討しなければならなくなった」と発表。**

人類学・言語学が実証する箕子の東夷教化

日本語の原郷は「中国東北部の農耕民」 国際研究チームが発表（毎日新聞 2021/11/13）**日本語の元となる言語を最初に話したのは、約9000年前に中国東北地方の西遼河（せいりょうが）流域に住んでいたキビ・アワ栽培の農耕民だった**と、ドイツなどの国際研究チームが発表し、英科学誌ネイチャーに掲載された。⇒「この共通の祖先は約9000年前（日本列島は縄文時代早期）、中国東北部、瀋陽の北方を流れる西遼河流域に住んでいたキビ・アワ農耕民と判明。その後、数千年かけて北方や東方のアムール地方や沿海州、南方の中国・遼東半島や**朝鮮半島など周辺に移住**し、農耕の普及とともに言語も拡散した。**朝鮮半島では農作物にイネとムギも加わった。日本列島へは約3000年前、「日琉（にちりゅう）語族」として、水田稲作農耕を伴って朝鮮半島から九州北部に到達したと結論づけた。⇒西遼河流域は「箕の地域（箕族の故地）」で、箕子が殷の遺臣を率いて半島に来たことを示すもの。**

壬申の乱と「隠された九州」(1)隠された倭姫王

隠された「倭姫王（やまとひめおおきみ）」

大海人は「倭姫王」を天皇に推挙するが大友が後継に

①倭姫王の出自は不自然　**（倭は本来ヤマトとは読めない。中国王朝から「倭国」と呼ばれたのは金印下賜以来の九州の国）**

天智は、**大田皇女**（後の天武妃）、**遠智娘**（持統天皇となる鸕野皇女を産む）、**姪娘**（元明天皇となる阿陪皇女を産む）、**伊賀采女宅子娘**（大友皇子を産む）を差し置き、謀反の罪で妃妾子等皆殺しにした古人大兄の娘の倭姫王を皇后としている。

②天智即位と倭姫王との婚姻は不即不離：即位は668年1月（それまでは何故か称制）、婚姻は2月とあるが、これは「式典の順序」で、実際は婚姻により即位することが出来たと考えられる。

・天智即位：『書紀』天智7年（668）正月戊子（3日）に、皇太子、天皇に即位す。

・倭姫王を皇后に：『書紀』同年2月戊寅（23日）に、古人大兄皇子の女倭姫王を立て、皇后とす。

③「倭姫王」は大海人が天智の後継天皇に推挙する重要人物なのにその後の消息が一切記されない。『書紀』天智10年（671）10月庚辰（17日）（大海人）請ふ、洪業（ひつぎ）を奉（ぁ）げて大后に付属（さず）けまつらむ。「天武即位前紀」陛下、天下を挙げて皇后に附（よ）せたまへ。

倭姫王13歳662年は伊勢王崩御の翌年。「壹與」は13歳で即位したように13歳は即位年に相応しい。倭姫王は伊勢王の次代の天子か。

『書紀』の倭姫王と九州の「大宮姫」伝承が整合

倭姫王はヤマトでなく倭国（九州王朝）の姫

『開聞古事縁起』の大宮姫は白雉元年庚戌（650）に薩摩の磐屋で誕生。2歳で太宰府に上洛（＊陸地より上洛とあるから太宰府）。その後13歳（白鳳2年・662）で近江に遷り665年に「天智」の皇后となる。天智崩御後（671）大海人の支援を受けるが、大友に追われ九州に帰還する。**大宮姫が倭姫王で九州王朝の姫**なら天智が倭姫王を娶り即位出来たのも、大海人が倭姫王の天皇即位を主張したのも理解できる。**天智は倭姫王の婿として事実上倭国（九州王朝）の王の権限を得て、近江令や「庚午年籍」の策定、国号変更等を行うことが出来た。 しかし「大友」は九州王朝とは無縁の人物で皇位を嗣げる者ではなかった。そこで倭姫王を推す大海人と倭姫王は、白村江で捕虜となり667年（『書紀』では671年）筑紫都督として帰国した薩夜麻と、彼を任命した唐の使節・軍のいる九州に逃れ、近江朝の転覆をはかった。これが壬申の乱の実際だった。**

壬申の乱と「隠された九州」(2)隠された九州の吉野

隠された「大海人が逃れたのは九州の吉野」

大海人は九州に逃れ薩夜麻・唐の支援で近江朝大友を討伐

①近江宮から奈良吉野宮までの行程日数は創作。

・幼い草壁・忍壁、舎人ら20余人・女孺10余人を同伴し、19日近江発、20日吉野宮到着とする。

②吉野宮とされる宮滝付近は袋の鼠のような地で、「虎に翼をつけた」と恐れるのは不自然。

③671年10月から672年6月まで吉野宮に滞在したとされるが、考古学上も天武時代に多数の同伴者や臣下・兵を収容できる施設は存在しない。

・「吉野宮滝遺跡」の主要建物は聖武天皇時代。天武・持統朝は2間×6間と2間×4間の掘立柱建物が東西に2棟。

④人麻呂の吉野宮の歌は奈良吉野の宮滝付近に合わない。

・36番歌（吉野宮に幸しし時柿本朝臣人麻呂の作る歌）「山川の 清き河内と 御心を　吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は　舟並めて 朝川渡る 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らす 水激る 瀧の宮処は 見れど飽かぬかも　」

九州王朝ー都督薩夜麻と唐に支援を求めた大海人

白村江で捕虜となった酋長は皆「都督」に任命され帰国

①九州には筑紫都督薩夜麻と郭務悰等唐の使節や兵が駐留（『書紀』天智6年に「筑紫都督府」）

・天武元年（672）3月己酉（18日）内小七位阿曇連稲敷を**筑紫に遣し、天皇の喪を郭務悰等に告ぐ。**

②佐賀には「吉野ヶ里」などの吉野地名や、滝、大規模船団が停泊できる有明海がある。

③『釈日本紀』に天武が唐人から戦術を教わった記事がある。・『釈日本紀』(調連淡海・安斗宿祢智徳等日記に云ふ）天皇、唐人等に問ひて曰はく、「汝の国は数（あまた）戦ふ国也。必ず戦術を知らむ、今如何」と。一人進み奏して言ふ、「厥（それ）唐国は先に覩者（ものみ）を遣し、以て地形の陰平及び消息を視さしむ。出師の方、或は夜襲、或は昼撃す。但し深き術は知らず」といふ。**（＊壬申の乱で天武に従った舎人の日記）**

④万葉集に大海人が九州に支援を求めたと考えられる歌がある。

佐賀には吉野地名や、万葉歌に整合する滝や舟遊びできる川がある。有明海岸は鑑真上陸の地とされ記念行事も。

壬申の乱と「隠された九州」(2)隠された九州の吉野

近江朝は西の九州からの侵攻を最も恐れていた

大友側の対応を見れば「壬申の乱」が、『書紀』に記すような近畿に限定した戦いではなく全国を巻き込んだ大乱だったことがわかる。⇒大海人が東国から攻めるのに東に逃げるのは不自然

◆天武元年（671）6月。近江朝、**大皇弟東国に入ると聞き**、群臣悉に愕（お）ぢて、京の内震動（さわ）ぐ。**或は遁れて東国に入らむとし**、或は退きて山澤に匿むとす。爰に大友皇子、群臣に謂（かた）りて曰はく、「將何に計らむ」と。臣進みて曰はく、「遲く謀（はか）らば後（おくれ）なむ。しかじ、急に驍騎を聚めて跡に乗りて逐（にげ）むには」といふ。皇子從はず。

何故東に逃げる？

大友皇子側は大海人皇子に組しないよう全国に命令した

全国的騒乱であることを示す

①【東国】則ち韋那公磐鍬・書直藥・忍坂直大摩侶を以て、**東国に遣す**。**②【大和】**穗積臣百足・弟五百枝・物部首日向を以て、**倭京に遣す**。**③【西国】**且つ、佐伯連男を筑紫に遣し、樟使主盤磐手を**吉備国に遣して**、並びに**悉に兵を興さしむ（兵を徴発）**。仍りて、男と磐手に謂ひて、曰く、「其の筑紫大宰栗隅王と吉備国守當摩公廣嶋の二人、元より大皇弟に隷（つ）きまつること有り。疑は反くこと有らむか。若し不服（まつろはぬ）色（けしき）あらば、即ち殺せ。」とのたまふ。

③-1【吉備】磐手、**吉備国に到り**符（おして）を授（たま）ふ日に、紿（あざむ）きて廣嶋に刀を解かしむ。磐手、乃ち刀を抜き殺しつ。

③-2【筑紫】男、**筑紫に至る**。時に栗隈王、符を承けて対へて曰さく、「筑紫国は、元より邊賊の難を戍（まも）る。（略）輙（たやす）く兵を動さざることは、其れ是の縁なり」とまうす。時に栗隈王の二の子、三野王・武家王、剣を佩きて側に立ちて退くこと無し。是に、男、剣を按（とりしば）りて進まむとするに、還りて亡されむことを恐る。故、事を成すこと能はずして、空しく還りぬ。

筑紫・吉備への遣使は佐賀吉野に赴いた天武への対抗措置

重要なのは西の備え

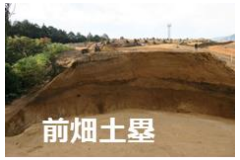
大友皇子側が「虎に翼をつけた」と恐れたのは、大海人が唐と筑紫の勢力を味方につけるから。『書紀』には、大友側は筑紫・吉備に使者を送り「兵を起こし大海人を攻める」よう申し入れたが拒否されたと記す。吉備国守を殺したのも、**筑紫から攻め上ってきたときに、吉備は重要な位置にあった**から。

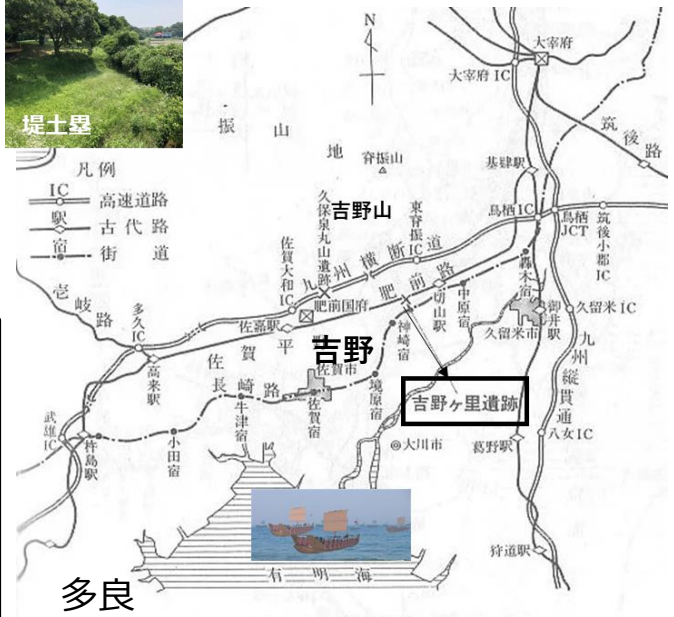
筑紫も吉備も大友側に付くことを拒否します。

壬申の乱と「隠された九州」(2)隠された九州の吉野

佐賀吉野は軍事基地だった　大宰府・唐津から軍用道路が伸びていた

【軍用道路】佐賀県には「**道路様版築土塁**」が存在する。その代表が三養基郡**上峰町の「堤土塁」**（大字堤字迎原。現存規模東西長約300m。東側で幅が10～15m。高さが1.5～２m。西側で幅34～40m、高さ4～5m）。これは、軍事防衛施設の「水城」や「大野城（大野山城）」と同じ「版築工法」で7世紀に造られ、**大宰府を起点とし吉野に通じる古代の「軍事用の高速道路」**だと考えられる。また玄海灘へは「壱岐道」も伸びていた。
【軍港機能】有明海は潮の干満差が大きく、かつ規則的で、**古代の干満を利用した停泊**に適し唐の船団も停泊していたと考えられる





天武の「佐賀なる吉野」入りを記す万葉25番歌

（25番）「天皇（天武）の御製の歌」み吉野の　耳我の嶺に　時なくぞ　雪は降りける　間無くそ　雨は降りける　その雪の　時じきがごと　その雨の　間なきがごと　隈もおちず　思ひつつぞ来し　その山道を⇒**奈良吉野に「耳我の嶺」はない。一方、佐賀吉野ヶ里の東に「嶺（三根、上峰町）」**（耳我は「尊く聳える」意味の嶺の枕詞。）**。そこに大宰府につながる堤土塁がある。天武は「唐」の支援が得られるか不安の中佐賀なる吉野への道を歩んだ。その心境を歌ったものだった。**（耳我の嶺は3293番で「御金が岳」に変えられている。）

万葉27番歌は唐の支援を取り付けた天武の喜びの歌

・淑人（シュレン）徳のある善良な人。・好（ハオ）はい、同意する

（27番）「淑き人の　よしとよく見て　よしと言ひし　吉野よく見よ　良き人よく見（＊多良人よく見）
⇒不安と悩みの中で吉野に入った天武は、駐留していた唐の郭務悰から、支援を取り付けることが出来た。27番歌はその喜びを表した歌だと考えられる。**淑人も好も中国人に対する言葉に相応しい。多良も有明海岸に存在。**

淑人乃　良跡吉見而　好常言師芳野吉見〈与・多〉良人四来三

壬申の乱と「隠された九州」(2)隠された九州の吉野

唐の支援を求めて吉野に赴いた時の大海人の不安な心情を表している人麻呂の244番歌

（244番）み吉野の御船の山に立つ雲の　常にあらむとわが思はなくに　題詞に「弓削皇子遊吉野時の歌」とあるが・・

奈良県吉野郡吉野町樫尾の「御船山」とされるが、何ら特色もないし伝承もない。一方、佐賀県武雄市に「御船山」があり、一見明白「船の形」をしている。そして、佐賀吉野から唐の船団の駐留する多良に向かう行程上に位置する。天武は唐の支援が得られるか不安な中で吉野から御船山を通り多良に向かったとすれば、唐の支援を求めて吉野に赴いた時の大海人の心情を表す歌に相応しい。**25番・27番と244番は天武が唐の支援を求めて佐賀吉野から唐の駐留地に向かう際の一連の歌だった。**

三船山（吉野郡吉野町樫尾）

（25番）**み吉野の耳我の嶺に　時なくぞ雪は降りける**　間無くそ　雨は降りける　その雪の時じきがごと　その雨の間なきがごと　隈もおちず　思ひつつぞ来しその山道を

（244番）**み吉野の御船の山**に立つ雲の常にあらむとわが思はなくに

（27番）淑き人の　よしとよく見て　よしと言ひし　吉野よく見よ　多良人よく見

そして、27番は唐の支援が得られた時の喜びの歌だった

壬申の乱と「隠された九州」(3) 高市皇子と九州王朝

創作・潤色された『書紀』の壬申の乱

①壬申の乱の「期間」は集約されている。わずか数日で数万の兵は動員できない。

㋐**6月22日**吉野で美濃国に兵を起こすよう指示。㋑**6月24日**婦女子含め40人ほどで吉野出発。㋒**6月26日**美濃国の兵3000人が不破道を塞ぐことに成功。㋓**6月27日**不破関に入る。尾張の兵20,000人参戦。

②大和・近江周辺のヤマトの王家の跡目争いではなく九州から東国を巻き込んだ「倭国全体の覇権を争う戦い」

・大友側（近江朝）は東国・倭京・吉備・筑紫に符（おして）をもたせ使者を派遣し挙兵を促す。⇒騒乱は全国規模。

・美濃国の兵3千人・尾張の兵2万人など**2万数千の兵は「一国が総力を挙げて戦った白村江の戦い」に匹敵する。一方で、本家ヤマト周辺での戦闘の規模は「桁違いに少ない」**・（龍田）300の軍士・（石手道・竹内街道）数百人・（中つ道）200の精兵。大和の吹負が集めた兵はわずか数十人。

⇒壬申の乱はヤマトの王家の家督争いとは異次元の戦いであることを示す。

戦を主導したのは大海人ではなく「高市皇子」

全て大海人が命じたように記すが実際は高市皇子の事績

【高市皇子、和暫で軍衆に號令す】高市皇子は和暫原（わざみはら・関ケ原）に結集した軍を掌握した。

【高市皇子、不破に軍事を監す】高市皇子は不破に行き軍事を監督。美濃の軍3千で不破道を塞ぐ。山背部小田・安斗連阿加布を遣し東海軍をおこす・又稚櫻部臣五百瀬・土師連馬手を遣し東山軍をおこす。⇒『書紀』記事を素直に読めば、これらは高市皇子の指揮による。

【高市皇子は諸臣・豪族を召喚】・高市皇子の命を舉げ、穂積臣百足を喚す（**命令権者は高市皇子**）

主語を入れ替え天武を英雄に

「命・遣」の一字を付加し主語を天皇に

・高市皇子號令軍衆。⇒命高市皇子號令軍衆。

・高市皇子宣近江群臣犯狀。⇒命高市皇子宣近江群臣犯狀。

これは『書紀』編纂における潤色の常套手法

・伊勢王、奉宣葬儀。⇒命淨大肆伊勢王、奉宣葬儀。

・伊勢王、遣・・工匠者等、巡行天下而限分諸國之境堺。⇒**遣諸王五位伊勢王**・・工匠者等

・伊勢王、遣・・等、定諸國堺。⇒遣伊勢王等、定諸國堺。

壬申の乱と「隠された九州」(3)高市皇子と九州王朝

壬申の乱の「論功行賞」を行ったのは高市皇子

・『書紀』天武元年（672）8月甲申（27日）、**高市皇子に命して近江の群臣の犯（あやまつ）状を宣らしむ。**則ち重罪八人を極刑に坐す、仍ち右大臣中臣連金を淺井田根に斬る。是の日に、左大臣蘇我臣赤兄・大納言巨勢臣比等及び子孫、幷せて中臣連金之子・蘇我臣果安之子、悉く配流す。以余は悉く赦す。丙戌（25日）、諸の勲功有る者に恩を勅して寵賞（ちょうしょう）を顯（あきら）かにす。

天武が命じたように記すが、戦ったのは高市皇子であり、実際は下記のように高市皇子が行ったとするのが自然。
◆「高市皇子、近江の群臣の犯状を宣す。」

九州王朝と深い接点を持つ高市皇子

①高市皇子（後皇子尊薨）（654年？～696年７月10日）。**天武の長子**とされる。母は**筑紫宗形君徳善の娘、尼子娘。**息子の長屋王の居宅から**「長屋親王宮鮑大贄十編」木簡**が出土。「親王」は天皇の子の称号なので「高市皇子天皇即位」説もある。**九州最大の石室を持ち、多数の宝物が発見されている宮地嶽古墳は、宗形君徳善の墳墓といわれている。**

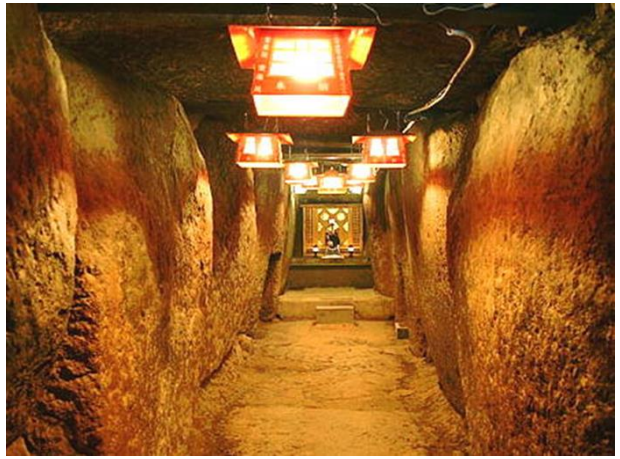
・天武2年（672）記事。「胸形君徳善女尼子娘を納す。高市皇子命を生しませり。」
・持統10年（696・大化2年）7月辛丑朔、日蝕有り。壬寅（2日）罪人を赦す。戊申（8日）使者を遣し廣瀬大忌神と龍田風神を祀る。庚戌（10日）後皇子尊薨る。

「宮地嶽古墳」全長23m・高さ幅とも5mを超す大規模石室を有する。約300点の宝物が発見され10数点が国宝に。九州国立博物館に寄託されている。

金銅製鞍橋覆輪金具

金銅透彫龍紋冠

宮地嶽古墳（径35mの円墳）



銅鋺・銅盤

金銅製壷鐙

金銅装頭推太刀柄頭（260㎝復元品）

⑷高市皇子と王朝交代「九州王朝からヤマトの天皇家へ」

天武中期には持統の子草壁皇子が№1とされる

②天武天皇8年（679）5月の天武・持統と6人の皇子（草壁皇子、大津皇子、高市皇子、川島皇子、忍壁皇子、志貴皇子）による「吉野の盟約」では**持統の子草壁皇子が筆頭**と書かれている。（高市皇子は№3か。『書紀』の名分で実態は不明）

・天武8年（679）5月甲申（5日）吉野宮に幸す。乙酉（6日）に、天皇、皇后及び（6人の皇子・略）に詔して曰く「朕、今日汝等と倶に庭に盟ひて千歳の後に事無らむと欲ふ、いかに」とのたまふ。皇子等、共に對へて曰く「理實灼然（ことわりあきらか）なり」とまうす。則ち草壁皇子尊、先に進みて盟ふ・・。（九州の吉野宮か）

不可解な天武後期から持統初期の草壁・大津・高市と持統称制

③天武後期の天武10年（681）に持統の子**草壁皇子**が太子となり、大津皇子が№2。

・天武10年（681）2月甲子（25日）草壁皇子尊を立て皇太子とす。因りて万機を攝（ふさねおさめ）しむ。（岩波注）「実際は政治の実権はほとんど委ねられていなかったらしい」

大津皇子が天武崩御直後の謀反事件で誅殺され、高市皇子は№2に。

④朱鳥元年（686）の天武崩御後も草壁はなぜか即位せず、持統が「称制即位」。

「持統称制と草壁の即位断念」は高市皇子の存在が原因。

・天武崩御は朱鳥元年9月9日。朱鳥改元は７月20日で天武崩御による改元でない。

・朱鳥元年是歳「蛇と犬と相交む。俄に倶（とも）に死す」とあり天武と九州王朝の白鳳期の天子も同年に崩御したことを推測させる。九州王朝の新天子が即位し、ヤマトの天皇家の天武の後継候補に九州王朝の系列の高市皇子がいる中で、彼を差し置き草壁を即位させれば、倭国（九州王朝）は高市皇子を推して「壬申の乱」同様の事態がおこる懸念がある。そこで、「後継天皇は未定」という形を保つように持統が「称制即位」したのではないか。⇒倭国の覇権をめぐる争いの激化を示すもの。

「持統称制」の実態

通説でも草壁が即位しなかったのは皇位争いに巻き込まれるのを防いだという説があるが、ヤマトの王家内の皇位争いなら大津皇子を誅殺した時点で懸念は薄れる。

しかし、**草壁の異母兄で、かつ九州王朝の宗像君の血統の高市皇子**がおり、草壁が即位すれば、倭姫王を差し置いて大友を擁立した時の事態が再現される危険があり、持統はこれを避けた、これが「持統称制」の実態か。

持統は壬申の乱の再来を避け、じっと我慢をしたのです

⑷高市皇子と王朝交代「九州王朝からヤマトの天皇家へ」

持統紀の高市皇子：持統期にも草壁皇子は皇太子のままにとどまり、即位に至らず持統3年（689）に薨去。皇族（皇子）筆頭№1は高市皇子となる。高市皇子は即位して当然だが、『書紀』では持統は高市皇子に譲らず持統4年（690）自らが即位したと記す。

⑤持統即位後、高市皇子は太政大臣として国政を統括し№1になり、藤原宮造営を進めるが**696年（九州年号大化2年）7月に薨去**。**高市皇子薨去後、誰を後継とするか紛糾**したが、翌**697年2月に軽（珂瑠）皇子が太子となり、8月に文武天皇として即位。**・『懐風藻』（葛野王伝）高市皇子薨りし後、皇太后、王公卿士を禁中に引い継嗣を立てむと謀る。時に群臣各の私好を挟み、衆議紛紜（ふんうん・もめること）。**高市皇子は九州王朝の血統を継ぐ人物で、天武崩御後は本来即位するのが順当だったのでは**　九州王朝の筑紫宗形君の血統の高市皇子は、ヤマトの天皇家では序列は低いが、九州王朝側から見れば最も高い序列となる。

大化2年3月（646）の皇太子奏請は九州年号大化2年（696）の高市皇子のヤマトの王家への権力移譲の意思表示

『書紀』大化2年の改新詔に「皇太子（中大兄とされる）が天皇（孝徳とされる）に自らの膨大な資産を献上した記事がある。

（前文）「**昔在（むかし）の天皇等の世**には、天下を混（まろか）し斉（ひとし）めて治めたまふ。今に及逮びては、分れ離れて業を失う。《国の業を謂ふ。》天皇我が皇、万民を牧ふべき運（みよ）に属りて、天も人も合応へて、厥（そ）の政惟新なり。是の故に、慶び尊びて、頂に戴きて伏奏す。

（下問）現為明神御八嶋国天皇（＊孝徳−696年なら持統）、臣（＊皇太子＝中大兄、696年なら高市皇子）に問ひて曰はく、「其れ群（もろもろ）の臣・連及伴造・国造の所有る、**昔在の天皇**の日に置ける**子代入部**、皇子等の私に有てる**御名入部**、皇祖大兄の御名入部、及び其の**屯倉、猶古代の如くにして、置かむや不や**」。⇒「昔の天皇が皇族や臣下の部民（私有民）やその経営のための所領をそのままにしていいか？」と問う。

（奉答）臣、即ち恭みて詔する所を承りて、奉答而曰さく、**「天に双つの日無し。国に二つの王無し。是の故に、天下を兼并せて、万民を使ひたまふべきところは、唯天皇ならなくのみ。**別に入部及び所封（よさせ）る民を以て、仕丁に簡（えら）び充てむこと、前の処分に従はむ。自余以外は、私に駈役（つか）はむことを恐る。故、**入部524口、屯倉181所を献る**」とまうす。

⇒「昔の天皇＝九州王朝の天皇」。持統の問いに高市皇子は「我が国の支配者はヤマトの天皇一人なので一定の基準以外は所有しない。そのため部民524人、屯倉181か所を献上する」と答えた。

⑷高市皇子と王朝交代「九州王朝からヤマトの天皇家へ」

大化2年の「皇太子奏請」の真実

【「昔の天皇」とは誰か】孝徳時代も上皇（皇祖母尊）として権力を持つ**皇極（後に重祚して斉明）の事績を否定？**
【「入部524口、屯倉181所」の献上の意味】入部524口、屯倉181所は全土に及ぶ規模。これを中大兄が献上することが可能か？そもそも皇太子が天皇に献上する意味は？ ・「名代・子代の屯倉から新たに仕丁として中央に出仕する入部は一屯倉から約3人、50戸に1人とすれば三郷程度の規模となり、入部524口は計算上26200戸＝屯倉181所を母体とする。」「形式的に全体を献上したうえで、実質的な経営権はあくまで王族が留保した」（仁藤敦史『古代王権と「後期ミヤケ」』国立歴史民俗博物館研究報告第152集2009年3月）⇒**「この時代のものか疑問」**（山尾幸久『大化改新の資料批判』第五章「皇太子奏請文の内容」2006年10月塙書房）

「皇太子奏請」が九州年号大化2年（696）なら、下問は「ヤマトの王家の倭国（九州王朝）への統治権移譲要求」

「**昔の天皇**の世は、天下を混し斉めて治めた」＝**倭国（九州王朝）の天子の時代は九州王朝の一元統治。**
「**今**におよび分れ離れて業を失う」＝**倭国（九州王朝）と日本国（ヤマトの王家）の2重権力状態**となっている。

⇒ **ヤマトの王家の一元統治を認めよ**

奉答は高市皇子のヤマトの持統への「一元統治を認め、人民・資産の天皇家への移譲を承諾する」意思表示

『書紀』の壬申の乱の潤色・創作の目的

王朝交代を隠し天武を傑出した天皇として描くため

『書紀』の編纂を主宰したのは「天武の子舎人親王」で、天武の孫の元正天皇（草壁皇子の子）に上程された。8世紀初頭に王朝交代を果たしたヤマトの天皇家が、『書紀』編纂時に、わざわざ壬申の乱に1巻を割り当て、大海人（天武）の活躍を記したのは、壬申の乱の経緯を大きく潤色・創作し、**①本来九州王朝と近江朝間の全国的騒乱を、ヤマトの王家の後継者争いとし、②乱における九州王朝・高市皇子の関与を隠し、③天武が逃れたのはヤマトの吉野に変え、④天武を壬申の乱における最大の英雄・傑出した天皇に祭り上げるためだった。**